道元さまに引かれて天童山参り

㈱ナリス化粧品
元常務取締役　東郷　敏

横浜善光寺、開創三十周年記念訪中団員として、黒田武志方丈に随行。その道程を見たまま感じたまま、書かせていただきました。

出発に際して

黒田方丈は出発に際して次のように述べられました。

「開創三十周年は改めてゼロからの出発。私はいつでも初心。三十にして初心横浜善光寺が、今日あるも〈宗祖を通して釈尊に還る〉が原点。今の世は仏法だけが生きていて、道元禅師さまのお姿を見ることができない。従って私たちは彼の地に赴き、道元さまの教えを全身で受け取ってきたいのです。

若き日、道元さまは、天童禅寺の如浄禅師に師事。大悟大事を成就なさいました。そして五年後帰国。その第一声『われ彼の地において柔軟心を学ばん』と喝破されました。

その彼の地とは、一体何処なのか？

皆様と共に聖地を訪ね、道元禅師さまの足跡

を歩いてみたいと思います。

皆様は横浜善光寺檀家三千軒のひとり代表です。訪中の目的は、

第一に、道元さまの足跡と、その偉大さを実感すること。

第二は、今は亡き善光寺初代総代により設計建立された、日中友好病院（日本国協力援助による）を訪ね、その功績を偲ぶこと。

第三は、四月十二日善光寺開基さまの二十三回忌法要をゆかりの地、北京広済寺においてとり行うこと。

そして世界の安心と平和、日本国民と横浜善光寺檀信徒さまの未来永劫ご多幸ご発展あるよう合わせて、祈念報謝することにあります。

皆様も、平均年齢六十一・一歳、決して若い旅団ではありません。

かつて如浄禅師さまのお師匠、雪竇（せっちょう）禅師さまが申された、

『三分の光陰、二早く過ぐ、霊体一点もかい磨せず、生を貪り日を追うて、区区としてさる。よべども頭を巡らさず、如何せん』

旅団の皆様も、早や人生も三分の二を過ごし、時間も限られて参りました。今一度自分の人生を振り返り、今日が残された人生の第一日目、第一歩。未来に向け、何をなすべきか、どうぞ二度ある人生と心得ず、今は今なりに、自分は自分なりに、夫々天分に従い、精一杯やる。これから出来ることは何か、それを知って出来ることから行動する。幸い道元さまの〈習〉われた〈法〉の元に参ります。馬の耳に念仏と言われぬように、目を見開きよく見聞して参りたいと思います。どなたさまも、きっと何処かで人生開眼の一語に接します。まさしく道元さまの〈後を踏み室に這入る〉ということになります。そのためには、いつ何処からでも受け入れる用意と、心の準備が必要です。

道元さまの歩かれた道程は想像もできない程に、遠く、険しく、厳しいものでした。船にあること三カ月。天童五山に〈行〉すること五年。

いかがでしょうか、そんな、ながーい道程を、この旅団は僅か八時間で走破することになります。どうぞしっかり心づもりして下さい。」

方丈の緊張ぶりがヒシヒシと伝わってくる。私に、旅の動機はあっても特別目的を持っていなかった。多分に観光旅行とばかり思っている。

急に気が重くなってくる。今、方丈より、一度の旅にと、新しい地図が与えられた。与えられた地図によって、新しい旅の新しい発見をしたい。

旅団の意志も方向も一致する。旅団は求道者。道縁は、お互いの信によって結ばれる。信なき道縁は烏合の衆。私も心の中をしっかり、整理する必要があるように思う。この訪中記も道中、実にわがままと迷惑を尽くした第一人者として、方丈より名誉の指名。その罪の酬いとして、書けと言われる。提出までに与えられた時間は僅か四十八時間、人の能力の限界を承知しない、方丈のいつものクセ。

仕方がない、書ける処まで書いてみる。

私は生来、道心これ微か。団員の中でも格別、信仰心の乏しきこと自覚して憚らない。いまだに道元さまの偉さも、立派さも、大きさも分かっていない。これまでお話下さる偉い先生方が、道元さまは偉い御方なんだと言われるから、偉い人なんだと思う程度。それだけに緊張と心配が先に立つ。

方丈の様子も、単なる旅行に行く様な気楽さが全く感じられない。これにはしっかりとした動機、目的が関わっているものと思われる。

時すでに遅し、乗り込んだ飛行機から飛び降りる勇気もない。

機中にて

飛行機は、予定通り午後五時成田を離陸。間もなく西に急旋回。徐々に西へ西へと向かっている。雲はない、珍しく機は青の空間に止まっているように思える。機中に太陽の光は全く差していない。限りなく陽の傾いた真西に向かっている。これはまぎれもなく西方浄土。旅団の目的地天童山を目指していることが分かる。機内もすっかり落ち着いたころ、さいわい持ち込んだ一冊の本。

道元さまの『正法眼蔵隨聞記』、とにかく読んでみる。これまで何度か目を通したことはある。しかし頭の中に全く残っていない。僅か三百ページの隨聞記、何としても上海に着くまでの三時間に読み終える必要を感じる。読み込んで行くうち面白くなってきた。

面白いだけではない、道元さまの御人なりが吹き上がってくる。

時折、ゆさっと揺れる機体、読み込んだものを頭の空間にほり込んでくれるに丁度いい。中あたりに差しかかったころ、方丈の機中訪問を受ける。ひそかな読書の時間を遮られても困る。「トーゴさん、なに読んどる。なになに、やっぱりな」だと思った、遅いおそいとひやかされる始末。「予定が狂いましたか？　残念でしたネ」なんともいい調子なんだから。おっしゃる通り、遅いのは私の特性。私の学びは、いつも何でも遅い。大概、追い詰められてから漸くですから、気にしてはいません。処が、人間追い詰められて、もがきながら学ぶと、実に入り方が違う、この極意を長年の経験から会得しているところに価値がある。追い詰められ、未だ猶学ばない人よりは上。

さて『隨聞記』も八合目。下界は一面青海原。道元さまの教えと、ご修行時代のご苦労が、見

事な描写で映し出され、新しい発見につながった。

道元さまは言っている。『仏道を学ぶ者は、後日を待って、行道せんと思うことなかれ、ただ今日、今時を過ぎずして、日々刻々を勤むべきなり』全く、お見通しじゃありませんか？　学びというものは、後日を待つという心であってはならない。

『海中に龍門と言う処あり、彼の処、浪も他に異あらず、水も同じく塩辛く、他に異なるところなし、しかしこの龍門一定の不思議あり、魚この処渡れば必ず、龍となるなり』私は一人感動している。いまは正にその龍門に向かっている。

このことを誰も知らない。私だけがそれを知っている。いま導かれるままに向かえば、私だって龍になれる。自由に空を飛び、地を這い、海に潜る事だって出来る。私だって、私なりに、祖師にもなれる。あと僅かな時間で、龍門に達するのだと思うだけでも、なんだか胸に熱いものが感じられる、こみ上げてさえくる。一体なんだろう。感涙で少し読み辛くさえなっている。

嗚呼！　なんと単純、無知なのか、見事な錯覚に陥っている。知りつつ抑えられない感動がある。この秘密話してはならない。私だけのもの。誰にも話さない、漏らさない。この龍門の不思議を得て、天童山に上りさえすればと運命が一変する、などと一人悦に入る。道元さまは全く目こぼしがない。こんなところを見抜いていらっしゃるように『示に曰く、無知の道心、終始退すること多し、知恵ある人、無道心なれども、ついに道心起こすなり』いまの世に、実例は多くある、それだからまず、道心のあるなしは問題にせず、仏道を学ぶことに力を尽くすべき…と人間大事なことは、力や知恵がないからといって、学ばず、修行しなかったら仏道を

得ることができようか、未来永劫その機会はない。いずれなにごとも後にと考えてはならないと、まことに微に入って、細に亘り教えてくださっている。

訪中するについて、色々な方々から、中国の現状に鑑み、特に衛生上のアドバイスをいただいた。まず生水は禁物、当然にして寺院を訪ねる訳だから、山また山の山奥に行くはずである。その為に救急箱を持ち込む程にあらゆる状況を考え応急処理用の準備をする。

ところが八百年前の道元さま、『旅に居て病気というものは、気の持ち様で転ず、入宋のとき、船の中でひどい下痢を患い苦しんでいた、そんな折り暴風で転覆の危機に遭遇、みんな大騒ぎした。わたしの下痢もその騒ぎで直って居た。このようになんでも、一生懸命考えると病気も起こるまじきかと覚える』と示してある。何で出発前にここを読まなかったのか。要は心もち、心構え次第。一生懸命考えて歩きさえすれば一切かかわりなし。これで私の訪中も、病なし、薬に頼る事なしと心得たり。さてさて病気にでもなれば、一生懸命が足りなかったことになる。くわばら。くわばら。

道元さま、貞応二年の三月下旬、博多を出帆。四月下旬、慶元府（寧波）に入港、慶元府に着いてなお船にとどまること三カ月。理由は色々想像されているようだが、彼の国の語学上達のため、或いは又上陸したあかつきに〈ケイショウ〉すべき寺ひいては師事すべき師家の選定に時間をかけられたと伝わっている。いずれにしても、用意周到ねばり強いご性格が観じられる。

この訪中に備えた〈中国語〉は……你好。謝謝。不明白。要迄。請勿吸因。これだけでも優に一カ月を要している。道元さまは、全く心構えが違っていた。機は進みはるか西の天空が真赤に染まるころ、機体は大きく揺れ、はっと我

に返る、流暢な中国語で、間もなく上海、シャンハイ……シートに身体を縛り付けるようにとのこと、シャンハイだけは鮮明にわかった。機体がガラガラ唸っているからには飛行場も近い。雲もない。陸地のはずなのに光が見えない、光がないということはまだ街は遠い……と思っていると、着陸態勢に入っている。私の概念は夜処かまわず、煌々と照らすところが街。誰彼ともなく暗い、光がない光が少ない、との声、そう思ったのはひとりだけではなかったようだ。しかし着陸してみると、最小限度の灯りはあった、これでいいんだ。

上　海

上海で一泊、いよいよ早朝からの巡礼に備えて身体を整える必要がある。しかしこれは表向き、中国の第一夜、素泊まりだけはしたくない。またそんな自分を許す訳にもゆかない。上海は中国最大の経済都市、人口千二百万人。部屋から、添乗員の陳さんにコッソリ電話、無理を承知で頼んでみる。彼は心易く応えてくれた。しかし、それでも二十三時を回っている。ホテルの玄関に待機しているタクシーを拾い深夜の街に飛び出した。

着いたばかり、ホテルの位置関係はまるでわかっていない。一時間も走り回れば大概の様子はつかめると踏んでいた。運転手がどこに行くのかと聞いているらしい、だったらこれが上海だという旧市街地から、外灘、そして出来れば、東方明朱塔ぐらいまで行きたい。ところが、陳さんは、「上海といっても東京の三倍の広さですヨ。そんなに走ったら、明け方までかかる」と言う。少々では帰れません。それを聞いて卒倒しそうになった。中国でのチョットは百里の感覚。だからといって引き返す訳にもいかない。「では往復三時間、走って、走りまくって欲し

い。運転手さんのスピード技術に期待する」と言った。その途端、十年以上も使い慣れているという車、レース場にでも降りたかのように唸り出して、みるみる周囲をうしろに飛ばしている。このドライブ誠に精神衛生上、極めて悪い状況が続いた、それでも、見たい知りたい気持ちにはかえられない、我慢する。この時間になると、中心街といっても薄暗い、光もポツポツ漸く輪郭がわかる程度、多分烏がいても見分けがつかなかったろう。国が変われば、動物の生態も違うのか……？　不思議と猫一匹、犬まで見当たらない。さしずめ珍しい発見もないままUターン。

しかし上海独特の夜の匂いは当分忘れられないだろう。ホテルに舞い戻ったときは丑三つ時。タクシーのメーターは一五五元（×15円）にもなっていた。貨幣価値が全くわからない自分、はじめて払うお金、何度か掛け算してもこれでいいのか、よかったのか心配になった。運転手さんが「謝謝」と大層喜んでくれる。これでも運転手さんにとってはよかったのだろう。とにかく、自分の住んでいる国の力というものは、国にいてはわからない。自国の金を使ってはじめてわかるその価値。……日本が高すぎるのか、中国が安すぎるのか……どちらかであることは、確か。実際〈豊かな国〉に過ごしているという実感がないだけに戸惑ってしまう。

ホテルのチェックインは二十二時。真夜中はタクシーの中、戻ったのは午前三時。起床五時。出発七時。部屋の滞在時間僅か二～三時間でこれでも一泊。折角の超一流ホテルなのにしかも最高の部屋のはず、まるで仮眠所。電灯を消せば一流も三流も同じでした。

中国事情

さてタクシーの中では運転手さんから色々、

国の事情、生活の情報など、沢山聞くことが出来た。これは収穫。上海住民の平均年収は八千五百元(×15円)、市場経済導入後、経済都市上海は中国で最も高い方だと聞かされた。チョット内陸部に入ると一千元～一千五百元(×15円)だとも言っていた。あくまでも平均だから、実態はわからない。目安としてはわかる。依然として貧困の差は、大きく、国は年収八百元以下を、貧困家庭と定義づけていることも知った。金額の分量で計る訳にはいかないが、一体どんな生活が出来るのか?…マイルドセブン五〇個分にも満たない、一日一箱チョット吸ったら、全ての生活費は飛んでしまう(大きなお世話ですが)。

そんな人達が一億人以上もいるというから、聞いて驚くより、むしろ胸が痛む。余談になるが、中国市場十二・五億人。この人口を当てにして企業進出しようものなら、所得レベルも格差もかなり厳しい状態が現実。余程慎重に進出しない限り、失敗は見えている。利益より、先ず国を豊かにする犠牲心が根底にない限り、進出する資格なし。

また可処分所得をもつ人は、およそ三千万人というから丁度日本と同じくらいか。マスコミや観光案内等いいことづくめ、どれも華々しい部分だけの紹介になるから、全く現実、実態がみえない。将来所得が上がれば(いつのことかわからない)市場は無限。昨今もてはやされた企業進出。しかし一部企業の撤退や、厳しい状況等聞かされとる、当然の様な気がする。あながち嘘ではなさそう。先ず日本的感覚の定規では測れない。社会主義国家の定義は、富める者も、貧しき者も、民主的であり、水準的であり、平等、博愛が理想だと言い続けたスローガンを揚げ続けている。一方日本の社会主義派も同じ事を言っている。

博愛はいい、平等は不平等。……不平等こそ平等かも知れない。

人間社会は何かにつけて競争の原理で成り立っている。そんなところで平等を振り回したら、言葉は美しいが、不平、不満、いい加減の社会になってしまう。努力の分量と成果に応じた分配。成果に与えられてこそ真の平等。これだったらだれも、納得出来る。それが市場経済の原理のはず。働く者、働かざる者が平等であれば、個人の意欲は減退するばかり。一体国の生産はどうなる、経済も立ちゆかないのは当たり前ではないか。ましてや、中国国民の優秀さは世界屈指のはずなのに、何故ここまで人々の暮らしが厳しいのか、わからなくなってしまう。

空には超近代ロケット、近代兵器、戦力は世界屈指。……なんと政治の難しいことかとそれでも解放後は、頭を使い、努力し運さえ良ければ、二万元～五万元は稼げるとも言っていた。そんな人達も少なくないとか、昨今十万元（百五十万円）を超える人達もあるというから、平等であるはずなのに不平等が見える。

これこそが〈真の平等〉近代社会主義の新しい在り方かも知れない。そして段々と努力の報われる国づくりが進んでいることも伺われる。

ちなみに運転手さんは、花形職業だとか。いい時は二万～三万元は稼げると、ハンドルたたいて誇っていた。だから夜も寝ないで走っていると言うから、いつ寝るのかと、聞いてみた。笑いながら「死んだら眠るから大丈夫」と。ここまで来て一緒に眠らされても困る。「頼むから僕を降ろしてから永久に眠ってくれ」と頼む始末。

朝食のとき、方丈より、「トーゴーさん目が真赤だ。どうしたんです。日本を離れて、もうホームシックですか？」……まさか一晩中働き詰めだったこと、籠抜けしたなどと言えたもので

はない。これまでの仕事柄、つい市場調査みたいになってしまう。

習慣とは恐ろしきもの、なんでも興味をもち、根掘り葉掘り、好奇心旺盛は、慢性的病、困ったものです。

状況描写や数値は、あるいは確かでない事も断っておきますが、およそ外れていないことも、確認しておきます。

寧　波

予定通り、上海より寧波に飛ぶ。さらに西へ三八〇キロメートル、およそ東京から、京都までの距離。寧波は紀元前二千年時代にさかのぼる。唐の時代は明州。

港は、日本への最古の貿易港。従って日本との歴史は古く、前後数十回の遣唐使の渡来また鑑真和上。また伝教大師、そして道元禅師の上陸の地ともいう。ここは随所に日本仏教ゆかりの名僧たちの足跡が残されているところ。

この旅団を案内下さるのは、陳さん。彼はこの国、寧波が故郷。天童禅寺で僧侶としての経験を持つ。横浜善光寺を通じ、日本仏教を学び修行した者、学びながら今は日中友好の旅行社に働く身、これ以上の〈天童禅寺〉案内役は先ずいない。

目的地も近い。道元さまは、未知の国、遠い彼の地に、命をかけてまで、何故？どうして？赴いたのか。誰でもすでに承知の事、しかし敢えて書くなら、道元さまは、一、二〇〇年（八百年前）一月二日久我家に生まれる。一二一二年、十三歳で叡山に。ここで学びを深めるに従い、叡山の名僧と彼の国の高僧たちの考え方が明らかに違うことを知る。道元さまの稜々たる気骨と無妥協の精神は、この国に正師なしと判断。十五歳にして彼の地で〈正伝の仏法〉を学ぼうと決意。叡山を下って足掛け四年、十八歳

にして、初めて尊敬する師栄西の法嗣、明全に巡り逢う。そし〈仏祖正伝〉の仏法を主張する禅の流れに触れてゆく。さらに追求せずにはおられない道元さまは、師の明全を促し、宋に渡られたという。ときに一二二三年。弱冠二十三歳、明全四十歳であった。後日、道元さまは『若し無上の仏道を学ばんと欲せば遙かに宋土の知識を訪うべし』と申されたそうな。いまで二十三歳といえば、大学を卒業、目標、目的もおぼつかなく、信念も哲学も乏しいばかりでなく、親のスネかじりつつ、職探しに明け暮れる年頃。比べ様もない偉大さ、やっぱり道元さまは偉い御方。

この偉い御方が、港に着いて三カ月間も船にとどまり、過ごした地。慶元府に到着した。道元さまは海から。旅団は空と陸から。時代は逆回りしているように思える。

対岸に停車したバスの中、道元さまのことを勉強したらしく、地元のガイドさんが指差しながら、位置関係やときの様子をあたかも『道元さま居ますが如く』八〇〇年の空間を埋め、呼び戻して下さる。今でこそ堤防があり、船着場も完備しているが当時は川の中あたりに停泊。小舟に乗り換えてキット泥沼に足を取られながらの上陸であったに違いない。

一路、天童禅寺を目ざす。東に向かうこと三十四キロ、道なき道をどの様に歩き、どれだけの時間をかけられたのか、想像もつかないご苦労が観ぜられる。当時宋朝における五山。霊隠、径山、浄慈、育王に囲まれた天童山。その合間を縫う様に歩かれたに違いない。

今でも、天童山への道は砂ぼこりを巻き上げひどい道。三十四キロの道程は、難所の難所。バスも左右に大きく弾む。当時なら三倍、おそらく一〇〇キロに及んだのではないかと想像する。

道元禪師像

平成十一年寫　横浜善光寺周叡

天童禅寺

バスに揺られること五十分。遂に天童禅寺に到着。東京を経ってより約三、二〇〇キロの道程。道元さまありがとうございます。思わず合掌。

遂に龍門に達した。胸にこみ上げるものを感じる。

門前は賑わっている。バスから降りると、方丈さまと蒔田僧侶の僧形が珍しいのか、異様なのか、大勢の参拝客や観光客の視線を浴びる。未だ社会主義体制の最中。帰依僧の信仰は芽生えていないらしい。敬意を払う様子は全くない。辺りにいるのは観光客だけでもないらしい、中には香花灯燭を供え敬虔に合掌低頭、熱心に、祈りを捧げている人もいる。赤い紙で巻き付けた大きなローソクを、一本二元（三十円）で売ってくれる。祈禱を頼むと、百五十元。ゆるやかながら体制も個人の信仰に対する自由も少しずつ変化しているのかも知れない。

改革解放後の中国の憲法では、社会主義の〈枠内〉での宗教活動ならある程度認められているらしい、しかしこの枠内というのが、難しく宗教活動が反体制であるか？否かは、当局だけが知っているというから難しい。

基本的には、先の文革で、宗教は過去の迷信として、厳しく非難された経緯がある。この時、文革の障害となった従来の伝統と文化遺産、史跡、仏像など宗教関係の宝物などことごとく破壊されたという。この思想はいささか、修正されてはいるものの文革当時、毛沢東主席が『宗教は毒薬』宗教は国の発展、改革を妨げ、大きな邪魔になる。第一に物質的進歩への障害、第二は民族を衰退させる、という基本的考え方があった。これは多分に変わっていないと思われる。それが〈枠内〉であり、わからない状況下

での活動は、想像以上に厳しいものがあるのではないか。

寺院などそこに仕える人々の様子を見ても、観光的要素が強く神聖な道場、犯し難い信仰の場という雰囲気とは違い、私の期待した所とはいささか隔たりがあった。

とにかく、時代とおかれた環境、国の事情など、しっかりと認識すべきであったことは言うまでもない。

中国は歴史的に日本のお手本。何千年という伝統と歴史。儒教や道教。そして仏教によって培われた素晴らしい、民族性と人倫思想がある。これは永久に人々のうづきとなって、受け継がれ、やがていつの時代かにまた再び生かされるものと、期待し信じたいと思う。(いささか筋違いの方向に来てしまいました) こんな時代背景と環境の中で、旅団も一歩一歩、境内を奥深くと進んで行く。あたりは、寺に仕える人々ではない、なんとも言えぬ、監視の目が気になる。決して優しいものではない。あるいは気にし過ぎていたのかもしれない。ここまで来たらそんなことはどうでもよい。今この地なら、たとえ繋がれようが、撃たれようが、つまみ出されようが、道元さまの第二の故里。にわか仏弟子を決め込んで、堂々の入場をさせて頂く。

大門の中央に濃いベージュの僧衣を肩から膝に流し、開いた傘を立てたように、合掌し凝視している一人の老僧、還暦はとうに過ぎている、なんとも稜々たる、その風貌。温にして厲し、威あって猛からず、恭しくして安し。まことに自然に具わった威厳。慎み深く、窮屈なところがない。いかにもゆっくりとして、見るからに親しみを感ずる。二時間前から、ここに立ち、今か今かとお待ちになっていたという。昼頃までにはと言った連絡方法が、こんなにも迷惑をかけてしまっている。

しかし、そこまで大事に待って、〈熱烈歓迎〉を頂くなど考えてもいなかった。

またそんなはずはないと思っていた。横浜善光寺の存在とは、一体なんなのか？

たかが、横浜善光寺。曹洞宗一万七千カ寺のひとつではないか。

この監院さま、階段を途中までトントンと駆け降りて、真中あたりで「黒田シェンシェイ・黒田先生」と方丈のお手を取り、手厚く出迎え、労をねぎらってくださる。見ていても、遠来の友が訪ねてきて、喜び合っているような、ほのぼのとした光景。

このお方こそ修祥監院。その人である。方丈が中国語で挨拶しているのかと思うほどに、お二人は思い思いの自国語で述べ合っている。

通訳は、先ず不可能、遠くで見ていて不思議はない。完全に通じ合っている。

あれでいいのだ。

早速境内の奥の院、最上層と思われる寺の接賓室にご案内いただく。

随分階段を昇った様に思う。その間、方丈と監院さまの対話が途切れることは無かった。

横浜善光寺育英会を通じて、天童禅寺とのパイプがいかに大きいか、私の想像をはるかに越えている。心篤いおもてなしは、胸を熱くする。

『朋遠方より来る在り、また楽しからずや……』か、方丈も安堵とよろこびで顔がくっきりと紅潮していた。

これすべて道元さまの御導き、此処に方丈のご信念〈宗祖を通じて釈尊に還れ〉が息づいている。

天童禅寺と道元さま

この古刹天童寺は西晋の永康元年というから、一、七〇〇年の歴史をもつ、かたや横浜善光寺は開創三十年。時間的には気の遠くなるよ

うな隔たり。

しかし流れはひとつ、そこには何の隔たりも無い。いま日本曹洞宗の祖庭にいて、その懐に抱かれているような安らぎ。表現のしようもない。

栄西、雪舟もまたここで参禅したという名刹。敷地四五、〇〇〇平方メートル。そこに天を突く様な、天王殿、大雄宝殿、法堂が並び、東側に鐘楼や御碑亭など多くの建家が甍を連ねていて登りつめると十八羅漢。道元さまは、ここのお堂を行ったり、来たり、何処に坐わっておいでになったのか、何処で食事をし、何処で経典を開き、何処で寝起きされたのか、廊下も、あの階段も、この土壁まで、手で足でふれられたに違いない。

そんなことに思いを馳せると、ご修行時代のお姿が目のあたりに迫ってくる。

つい宝殿で、土塀に頬をこすりつけ、道元さまの声を聞いてみる。ただシーンとして、何も聞こえない。土壁は温かかった。

ここ天童禅寺は五山に囲まれている。春、夏、秋、冬、さぞ四季の移りも、趣があり美しく、道元さまはいつも好時節、極楽浄土であったのでは……

『春は花、夏はほととぎす、秋は月、冬雪さえて冷しかりけり』(傘松道詠)この美しい詩もこんな環境、境遇で、詠われたのではないだろうかなどと思ったりもする。

大本山永平寺は、道元さまが、この寺を模して作られたと本に書いてあった。と言われてみれば、本当によく似ている。後ろに大山をいただき、山の傾斜を最大限利用し、一階のない二階、二階のない三階へと、階段が何処までも続いている。門前の様子まで同じと言ってもいい。永平寺だけではない、宗派かかわりなく基本的構造がよく似ている。この形が原型になってい

るのではないかと、不思議に思った。
接賓室で、寺の様子や、道元さまのご活躍、昨今の事情など少しずつ伺い知る事が出来た。やがて監院さまから、なにやら一幅、前住持広修法師さまからの贈り物として、方丈にお渡しになる。法師はすでに光りを失い、全く物を視ることが出来ない。
方丈の、折角のご訪問にも、出迎えできず、お話しすることも叶わぬこと、お心添えて手許に。暗黒の世界で託した法師さま心眼の一筆。
方丈はそれを頭上に戴き、全身を震わせ、感泣に咽んでいる。それがどれ程尊いものか方丈は知っている。私にはわからない。
しばらくして、方丈から監院さまに、訪問の主旨など改めて報告。育英会の現状と展望、これを機会にさらに、〈宗祖を通じて釈尊に還る〉を原点として、二十一世紀に向け一層の精進を誓う、と挨拶。
間もなく、堂の準備も整いたるご案内に、蒔田僧侶の引導で、身も心も威儀も正し、旅団は天王殿に拝登する。堂に至り、方丈より、お参りせし目的と意義、そして宣誓。蒔田僧侶により、宗朝五山に届けと導いて下さる読経に旅団も声高らかに『般若心経』に続いてゆく。
壇上の三世仏は、金色燦々、にこやかに、ほほえみ、よこはま善光寺一同を温かくお見護り、受けてくださっている。旅団の大合唱。全山に木霊する。
感極まり、声も途切れながらの読経、道元さま曰く『仏法に値うこと希なり』今この格言を全身で受けている。ここには、〈大いなる救いとよろこび〉が在る。
あらゆる存在がまばゆく、光を放っている。ふと、脳裏に修証議第一章がよぎる。『生を明らめ　死を明らむるは　仏家一大事の因縁なり　生死の中に仏あれば生死なし…』『人身得ること

難し　仏法　遭うこと希なり　今われら宿善の助くるに依りて　己に受け難き人身を受けたるのみに非ず　遭い難き仏法に値い奉れり…』私は完全にうたれてしまった。

道元さまの声が確かに届いた。届いた様な気がした。大いなる哉、道元さま。

此処は一番天国に近いところ。私はこの地、ここに立つまで人知れず、密かに胸に閉じ込めていた。

二十三年前、幼くして天国に送ってしまった吾がいとし子の遺影。そしてひとつの形見。

いまひとつ、善光寺開基であり、いいつくせぬ精神的、物質的、大恩人村岡満義さまの遺影。奇しくも、同年同時この二つの大事な大事な存在を失ってしまった。あれから早や二十三回忌を迎えるに当たり、どうしても彼の地、否、この地で御仏さまと道元さまに、年忌の報謝と供養。天に召され、救われ、導かれて逝き、いまは極楽浄土にある二つの魂に改めて感謝の誠を捧げ尽くすこと、ついに叶い唯々感謝。こみ上げるもの押さえることができなかった。これで二十三年、ずうっとしまい込んで来た荷物を降ろした思いがする。本当にお参りできてよかった。合掌。

『山に登らば須らく　頂に到るべし　海に入らば　須らく底に到るべし　山に登って到らずんば　宇宙寛広なること知らず　海に入って底に到らずんば　聡明の浅深そしらず　云々…』この境地こそ、此処の頂をきわめたものだけの実感。山に登らば須らく、頂に到るべし。原点に還る尊い体験をする。

黒田武志方丈あればこその体感。横浜善光寺の偉大な存在。そして方丈の放つ波動。その力をまざまざと見せつけられた思いがする。

方丈と発願利生

何故、方丈が曹洞宗の原点、天童禅寺にこだわりつづけ、つねに頭上に天童禅寺を戴き敬い慎み、これに服して、おいでなのか。

どうして悉くあらゆるものに対し燃えたぎる情熱を発しておいでなのか。あの徹底した本心真心とほとばしるご至誠はなんなのか。不思議でならなかった。

全て発露の根源は〈利他〉。いつでも、何に対しても私がない。これが全ての基本になっている自分を尽くして、なお尽くしても、「尽くし足りぬ」心が波動となり、振動となって、影響させ周囲を動かしている。此の在り方こそ、方丈の真骨項。

私などまず自分、自己中心に考えてしまう。時として、人のためにと思ってはいる。しかし身体が〈利己〉、心と裏腹に動いてしまう、だから厄介だ。

方丈は違う。いつも違う。とても同種族とは思えない。あの姿勢こそ、道元さまの教える〈発願利生〉の実現であり、そのための行動になっているのかもしれない。数えきれない発願と利生。すべて並の信念や思いつきで、できるものではない。これ如何に。

天童禅寺大雄宝殿、釈迦牟尼仏に拝し奉ったとき、方丈は、大地に平伏しまさしく、広大無辺宇宙を抱くように、否、抱かれているように、翼如たり、そして洋々と大合掌。

いかにも御仏の故里に遊ぶような、穏やかさの中に一心不乱の〈行〉その一挙手一投足見事な振舞い。実に大らかに蕩々と読経三昧する。これは一朝になせるものではない。専門家の方は、形としてご覧になるかもしれません。しかし魂のある・ないはわかります。

〈行〉と〈習〉いで培われた権化。

ついに私は見た。あの不思議の根源を。これこそ、黒田方丈の神髄と見た。

拝登諷経を終え、接賓室のとなり、禅寺食殿にて天童寺心尽くしの精進料理を戴く。まことに絶品の数々、とても私の表現力では説明不可。この精進こそ中国料理の集大成なのかもしれない。まるでベルトコンベアにでも乗せられた様に、次々と持ち運ばれて来る。自然界の全てと言っていい、木の根っこから葉っぱの先まで。あらゆる薬草と野草等とりまぜ天童山を食材に、そっくり鍋で煮込んでしまった様な精進料理。なんと奥の深いことか。あまりの豪華さに、はじめはおそるおそる慎重に箸を運ぶ。場所柄、出来る限り上品に振る舞おうと思っている。また控え目にしようとも思っている。しかし、だんだん私の箸は、意に添わない。この時点では作法など考える余裕すらない。

なんと中国料理の素晴らしいこと。思いやりに溢れている。誰が、どれだけ取ってもわからない仕組み。やがてクルクル回って、減ったところが余所に行く。中国料理とはそんな料理。実に安心と豊かさを添えて最高のうまさを与えてくれる。後味のいい、忘れ得ぬ料理を堪能し、やがて天童禅寺をあとにする。

僅か八時間の滞在、必死だった。旅団の皆様も、何もかも見逃すまい、聞き逃すまいと各々思いをめぐらし、忘れ得ぬときを過ごす。八時間いれば八時間の足跡。

阿育王寺

次行程への道すがら、道元さま、ゆかりの深い育王山阿育王寺に参拝。

道元さまが、慶元府で三カ月間も上陸しないで船で過ごしたときのこと。その船に尋ねて来た一人の老僧。その人、阿育王寺の典座とわかる。道元さま、好機を逸すべからずと典座にお

茶を出したり、引き止めたり、あげくの果ては、いま少しご教示に預かりたいと、一泊を促す。しかし、断られる。それでも押しの一手。典座に『育王山ともあろう名刹、貴僧一人ぐらいおられずとも、典座の代理に事欠く事ありますまい』と詰め寄る。

それでもやっぱりダメはダメ。なおたたみかけるように、いまひとつ『如何なるかな是れ文字、如何なるかな是れ弁道』

典座曰く『一、二、三、四、五』なんとも面白い。道元さまの執着心といおうか、人間らしくて、なんとも親しみを思う。そのときの光景が目に浮かぶ。

道元さまも後に、弁道を了ずること、すべて『典座の大恩』とまで言っている。あるいは、中国の第一歩は〈掛錫〉した天童山ではなく、違う意味で阿育王寺であったかもしれない。天童山より阿育王寺まではバスでおよそ二十分。

参道は大変な賑わいである。大門を入ると有名な舎利宝塔が（四〇〇年）天高くそびえている。

あたりは何かきな臭い。それにしても異常。この寺もまたたくさんの監視の目が気になる。消防隊まで境内にいる。事情がわかった、どうも昨夜、境内の建屋が焼失したらしい。道理でまだ燻っている。これは大事件。重要な文化財だったと聞く。

実はここまでのバスの中に天童禅寺の監院さまが同乗していた。車内では、方丈と親しく話しておいでだった。てっきり旅団見送りのため、同乗されたのだと思っていた。ところが実はそうではなかった。旅団を天童山で出迎え、持て成すために火事の見舞いを先送りされていたことがわかった。なんというめぐりあわせか。何千年に一度しかない大事件だったという。何か言いしれぬ因縁めいたものを観じてならなかっ

た。

西安

この日午後三時四十分、西安に向かう。西安はその昔〈長安〉、日本に『般若心経』を、もたらしたゆかりの地。機は予定通り離陸。グーッと内陸部に入り込んで行く。道程二、七〇〇キロ。やがて機内アナウンス。このフライト、西安への直行便だが、途中武漢に、臨時着陸する。と陳さんが通訳する。理由は、「武漢に行きたい人がいるので、途中降ろし、また乗る人があったら拾ってあげます」と言っているらしい。西安には一時間三十分遅れとのお断り。聞いて冗談だと思った。「地方ではよくあることです、気にしないで下さい。」と陳さんが言う。どうでしょうか、この芸当。飛び立つ前ならわかる。しかし、飛び立って客をシートに縛りつけてから、一方的通告、航空会社の都合とはいえ、考えられない事態。しかし誰一人、気にしている様子もない。中国の人たちは偉い。苦情をいうものもいない。ただどんな事態にも、ハイ、ハイ、ハイ、なのか。機体の異常ならとも角余程な理由がない限り日本では許されないことも中国では許される。

民族が異なれば、認識も感覚も違ってくるのは当たり前だとは思う。また価値観まで違ってくるのも当然にしても、常識は通用しないのか、すこし腹が立ってくる。私は怒鳴ってみた。「そんな馬鹿な、田舎のバスじゃあるまいし、客をなんと心得ている、勝手もいい加減にせい」と、吠え立ててみる。通ずる筈もない。

スチュワーデスに、日本語が通じたか、ニッコリ笑って、〝請　チーン〟と、水を持って来てくれた。さすが水の差し方がうまい。

後方より方丈が、「東郷さん、なに暴れているんですか？ここは中国、余所の国。名に恥じぬ

よう郷に従えというではありませんか。何も急ぐ旅ではありませんヨ」どうぞどうぞと宥めてくださる。

まあそれもそうかと諦める。

さすが大陸、お国柄。日本の二十六倍もある国だから、何があっても、起こっても分かりゃしないのだ。日本から勝手に来て、中国の伝統と歴史にケチつける。そして、社会主義国家だということも忘れてしまう。しかし、どう逆らってみても、通用するものではない。通用させようとするところに、所詮ムリがある。

考えてみれば、報謝の旅。先ほどまで御仏の前で涙して人間性に少しめざめ、あれから数時間、まだ目は潤んでいるはず。ところがどうでしょう。もう合点がいかんなどと腹を立てている。

よーく考えてみると、行けないはずの武漢にもおりた。一時間半も余分に空の旅が出来た。喜ぶお客さんが乗り降りした。いいことずくめではないか。

私の修行や改心など口先だけ、人生、ブツブツ言うて事が好転するなら言うてもいい。言うても叶わぬと思ったら、やめたがいいにきまっている。

機は再び西安に。いよいよ般若心経の故郷。ここらあたりで今一度心の立て替えだ。急にうれしくなって来た。程なく西安に着陸する。ところがにわかに機内がざわめき歓声となる。なにやら拍手、喝采。それにしても、異様なはしゃぎよう。聞いて驚く、なんと西安は雨だという。

なぜ雨に拍手喝采なのか。実に不思議な光景。聞けば、待ちに待った天の恵みに遭遇したらしい。一月と二月は全くなし、三月中旬に僅かな降雨量。そして、二度目の雨。そんな中、西安に歓喜の第一歩を印す。濡れるかと思えば、そ

うでもないシト、シトという程度、それでも雨。人ごとながらよかった。人間少し心を入れ替えると奇跡に出逢う。観光案内に西安は霧と砂嵐の街。と紹介されている。

先ず青空を見ることはない、遠くを見ることもない。ここ西安のためにと、みんなわざわざ防塵マスクを携帯して来た。ところが、明けて翌朝。西安の空はブルーに染まっている。風も砂塵もなく、遠くの山々がくっきり見える。ガイドさんが、今年最高の一日だと言ってくれる。

般若心経の故里

昨夜の雨で、すっかり洗われた西安。道元さまからの最高のプレゼント。早速、般若の里、般若心経の原点、大雁塔に向かう。

『般若心経』というお経ほど簡単で、親しみ易いお経はまずない。これは、宗派を問わず誠に便利な共通語。どんな場合でも、どんな場所でも、これを知ってさえいれば大概事足りる。これは一体何故なのか。誰が作って、誰が日本ん持ち込んで来たのか、敢えて知る必要もなかった。

これまで何度か偉い先生方に、お話を伺った事はある。しかし大概、その先生だけが解っていて、難しくお話くださるから、心に残らないでいた。或いは方丈みたいに、食うや食わず極貧の中で行脚托鉢でもしたら『ギャティぎゃてい、ハラソウぎゃあてい』といくらかでも理解できていたかも知れない。しかし幸いにして、そんな機会には恵まれなかった。

このお経、なんとも詩的でリズムがあり、流れがいい。覚え易く、少々間違っても、どこからでも、何処へでも入れる仕組みになっている。また忘れてしまい、同じ処を繰り返しているといつの間にか終着駅についてしまう。のり継ぎ乗り換えも実にスムーズ、限りなくエンドレス

なのである。
それでいて、いつ間にか心が和んでくるから不思議だ。
先ず眠れぬ夜など、私はながーい間習慣的に睡眠薬代りに使っている。するといつの間にか深い眠りについてしまう。翌日どこまで唱えたか、何度唱えたか覚えていない。般若心経とはそんな魅力を秘めている。
さて一体この魔経、どこから誰がいつ？いよいよその問題解決をしてくれる。
西安への機中方丈に聞いてみる。「だから、東郷さん西安なんですよ。大雁塔なんですヨ、玄奘法師さまなんですヨ。」全く意味不明、何を言ってるのかわかりゃしない。
これも、方丈一人わかっているだけ。
仕方なく相槌を打った。そうなんですネエー。孫悟空が八戒と沙悟浄たちと妖魔を追っ払って旅した、あの物語でしょう。知っていますヨ。
方丈が、それじゃ三蔵法師さまも玄奘法師さまも般若心経も出て来ないじゃありませんか。
此処、西安は、西遊記の起点。あの三蔵玄奘法師さまが主役。
三匹の家来に神通力を与え、インドに旅をする。その往き来、艱難苦労して百魔を征服、ついにお釈迦様の仏典を持ち帰る。これが般若心経の原点です。
三蔵法師二十二歳で得度。中国仏教の教典を学ぶうち、仏教哲理に疑問を抱く。なんとかその疑問を解きたいと念願。そのためには仏教の原点お釈迦様のモトに行く。そして仏道を極めたいと決意する。
しかし当時シルクロードは死のロード。ために国からの許可がおりない。
そんなことで諦める玄奘ではない。ついに国禁を犯し、長安を離れ西国浄土インドを目指す。玄奘二十七歳。なぜか道元さまを思い出す、状

況がダブッてくる。

道元さまも、また命を賭し天童山を目ざしている。一方玄奘法師は一年がかりで、一二、五〇〇キロを歩き通し目的地インドに着く。

どうでもいいことだが、仮に三六五日それを配分すると、一日三四キロチョットずつを走破したことになる。

当時の状況からは考えられない速さ。玄奘法師は、道なき道をただひたすら西方に向かった。

『空には一飛鳥なく、地には一走獣なし、人骨獣骨類を持って行路の標となすのみ』といった法師の文字をみれば、どれ程過酷なものであったか想像がつく。

インドに着いた玄奘法師は、お釈迦様の足跡をたどりながら、膨大な経典を集める。それを携え、また来た道を引き返す。

ときすでに四十三歳。帰国の道程は往路の四倍もかかったという。この道々の出来事が西遊記。物語は面白い。三蔵法師は思いやりに溢れ、旅を通して人間が犯しやすい邪心、良心、悪行、善行が限無く描かれている。

さて、難儀して持ち帰った梵語経典は、七五部、一三一五巻。帰国してからは漢訳に没頭。その集大成が『大般若経』であり、それをさらに凝縮、僅か二六二文字にまとめたのが『般若心経』だという。

この二六二文字、この中には天地の真理と人間最高の知恵、仏智について、その神髄をまことに簡潔に教えてあるのだという。

能に般若の面あり、お酒を般若湯といい、救い船を般若の船ともいう。多分、夫々に深い意味があって、この語も生まれているに違いない。明らかに『般若心経』が、原点になっていることは間違いない。出来たらこの執筆で、般若心経とはこれ也。と解いてみたいと思ったりもする。しかし簡単にはできない。

悲しい哉、理解し表現する能力がない。本屋に行けば、関係書だけでも山と積まれている。同じ内容であるはずはない。その人その人の知恵の分量と能力に応じ、またその年代において、どの様にも解することの出来る古典は化物なのかもしれない。

深く学び、理解し、私を無くし、行じてこそ、般若心経の原点神髄に辿り着くのかも知れない。大般若経を通じての『般若心経』でなければ、先ず本当の理解には至らないだろう。此処は専門家にまかせよう。当分、お経読みのお経しらずで行くよりほかない。生きている間は、もちろんこの程度。先々土の中に入ってからユックリ解いてみたい。

話は前後した。三蔵玄奘法師はついに、凡語から漢語（今の日本の経典はおそらくこの漢語訳がモトになっている）に完訳した。

大雁塔

漢語経典を、なんとか保存したいと願う玄奘法師。時の高宗がこれを聞き入れ、玄奘自身に納経塔をつくらせた。これが〈大雁塔〉。当時は五層であったらしい。のち地震、戦乱で壊れた塔を修理したり建て増しにより十層になったり、また七層になったり。現在は七層六四メートルという高さだ。

旅団は大慈恩寺に参拝後、大雁塔を三十分で登破するようにとのこと。急ぐ旅だから仕方がない。ヨーイドン、なんとか急傾斜の階段を、般若心経を唱えながら登ってみた。三層まで登り、息も絶え絶え、途中で登頂を断念。しっかりと理由をみつけた。最頂が『大般若経』三層目は『般若心経』なのだからとそのまま降りてしまった。

決して残された時間がない訳ではなかった。

三層あたりで玄奘さまのことをチョットでも思い起こせば或いは踏ん張れたかも知れない。それにしても、もう一息だったのに惜しかった。

これこそ現代に生きる、いい加減な人間の形骸、全く口先だけ。道に近づいても道を行ずることができない。やったつもり、行ったつもり、わかったつもり、つもりつもって一生恥じのかき通し。

あげくの果ては、登るに充分な時間がなかったからとか、疲れていたから、階段が急すぎたから等、人やものの所為にしてしまう。

問題やその原因が自分自身にあると気づくのは、いつのことなのか？

論語にあった。『たとえば　山を偽るがごとし未だ　いっきを為さずして　止むは吾が止むなり。たとえば地を平らかにするが如し　いっきを覆すと雖も　進むは　吾が行くなり。』人間なにをするでも、要するに、〈退くも・進むも〉自分自身の意志によるのであって、けっして人によるものでない。また、書経にも『山をつくること、九仞の功を、いっきに欠く』と同じことを言っている。

学びを深め、徳を高くする工夫。すべて諸々は自分自身の責任とすべきことと教えている。とにかく、なにごとも人のせいにするな、自分のせいにしろということ。大雁塔の参拝終了。

西安ならではの、秦の始皇帝陵、兵馬俑坑など見学。また初めてショッピングの時間をいただいた。特に買いたいものはない。しかしバスが自動的に買いたくなるような、政府のショッピングセンターに吸い込まれるように横付けをした。見ているうちに買いたいものはあった。しかし何もかもあるものは、世界にひとつだけ。中国ではここだけしかないの連発を聞いてるうち、本物、偽物がわからなくなった。他の場所で買ったものは偽物であり、高い買い物になる

と教えてくれる。聞いているうち頭がおかしくなる。したがって買いたくとも買えない。結局価値があるのかないのか？皆目わからずに目の保養に終わる。以来、帰国の日まで、何ひとつ買うことが出来ない。それでも何か土産物と思い、ザーサイをデパートで十個、手にして帰国した。

女房が、「お父さん、角のスーパーに同じものがある」と教えてくれた。泣面に蜂でした。それにしても折角行ったんだから、水晶玉の一個ぐらい持って帰るべきでした。

私のショッピングはショッピングというより、ショッキングでした。

悠久

西安は幾多の王朝の栄枯衰退。歴史的にはシルクロードの出発点。ここより東西に絹を運んだのが語源、絹の道。市の中心部を取り囲む城壁も、明代のものだという。二千年前後の史跡。中国悠久の流れは止まっていなかった。遺跡というより奇跡。唯々、唖然とする。スケールが大きくて表現の仕様もない。それでも、ほんの一部だというから声も出ない。西暦前二千年～四千年と聞くだけで、気の遠くなるような、悠久の大地。そこにとり残された遺跡。中国の歴史で、戦国、秦代、前漢、後漢とくれば、キリスト以前のこと。

日本では縄文から弥生といった石器時代。石おのや矢じりを持って、狩猟に明け暮れ、横穴か竪穴に生活していたと、中学校の歴史で学んだ記憶は間違いだろうか。日本でも最近あちこちで発掘しては、最古、最古と古さを競っている。

しかし、目を見張るような遺跡など出て来ない。中国にこれ程の文明、文化があったとするなら、日本は一番近い国、何千年も置かれるは

ずがない。本当に日本の歴史に間違いはないのか?と疑ってみたりする。私の表現について専門家の方はさぞ滑稽に思い笑っておいでかも知れない、歴史を知らない幼稚な疑問。もしかしたら、日本のどこかに、忽然と埋もれた古代の遺跡が発掘されるのではないかなど、あまりに大きなギャップに本心戸惑ってしまっている。

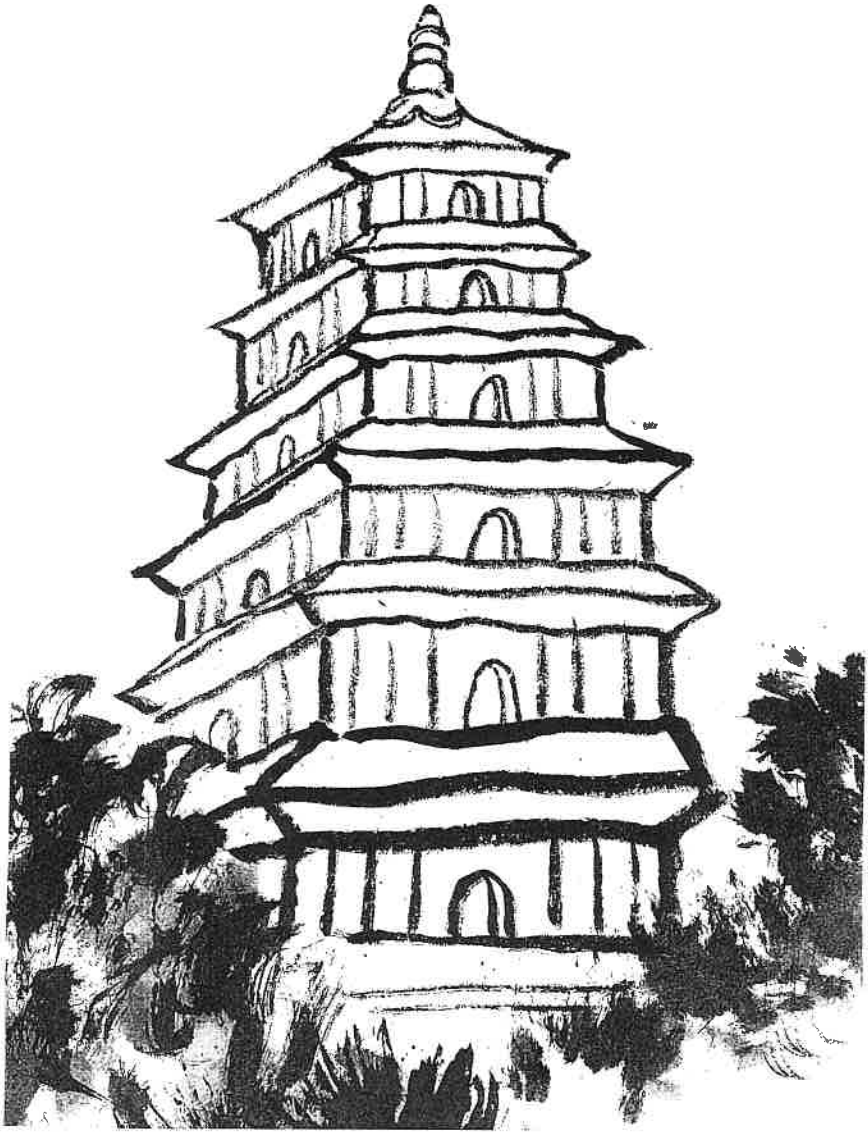
ここに立ち〈悠久〉ということばをはじめて理解し実感した。人間の命、一人の一生なんて、なんとはかなく短いものかと。ここの尺度で測るなら、たとえ百寿を全うしたとしても、どうにもならない、アッと声も出ない程の短さ。この短い命をつなぎ継いで、さまざまな生活や文化、歴史や伝統が培われ築かれて来たという感を強くした。これ迄考えもしなかった角度から、悠久杭をグサッと打ち込まれた。

仕事の関係で、世界各地を歩き、その国のことはなんでも知っている、知っていると思い込んでいた。実は幻。本当は何も知らなかった。あってはならない錯覚に、ようやく気づいた思いがする。

インド、中東、エジプト、アフリカ、ヨーロッパ、南米あたりなら、これ程のショックもなかったと思う。だが隣の国、想像を絶した〈悠久の遺跡〉。これはどう収めて良いのか戸惑うばかりである。

旧約聖書の中に、『陽はのぼり　陽は沈む　また　もとのところに戻って行く　ひとつの時代は去り　次の時代が来る　しかし地はいつまでも変わらない　昔あったことは、これからもまた起こる　陽のもとに　新しいものは　何一つない』と謳いあげている。

いま真にこの言葉が解った様な気がする。美しい詩だと思う程度だったが、これは西安のショック以来、脳裏から離れない。これこそは宇宙自然の摂理、方程式を教えたものと思う。天



地の運行と同じく、人の一生もまた生ずる者、逝く者。自然界もまた、春去って夏来り、秋去って冬来る。あたかも水の流れのように、無限に持続し止むことがない。孔子も『川のほとりに在りて曰く、逝く者は斯くの如きか、中夜をわかたず』といっている。私もまた、悠久の流れの一滴。はるか東の空に思いを馳せている。土地の人にどこから来たか？と問われればきっと、東の邦。日本国、縄文県、弥生郡、横穴町字竪穴一五―三四番地。と答えたに違いない。

さて、ここまで書き、一体何を書いてきたのか、何を言いたいのか、まことに思いつくまま、方向に狂いが生じています。何でも書けと言われて、本当にその通りになってしまっている。閉じようもありません。今少し、取り留めもなく続けて参ります。さて、とにかく、今の中国、世界人口の二五％だということ、食糧事情から人口の抑制という、一人っ子政策は辛い政策。やはり自然ではない。胸の痛みを感ずる。それでも世界の二五％の人達が中国語を使っていることになる。

大変なこと、いま迄こんな認識もったことはない。毎日二十七億食余りを中国の人達だけで、とっているとなれば、やはり食糧の心配が先に立つ。土地は広大でも不毛の地はあまりにも広い。こんな国が、仮に、日本やアメリカの様に自由奔放にしたら国が治められるのか、日本のように資源を浪費し、消費に明け暮れるようになったとしたら、食糧は、エネルギーは、一体地球環境はどうなるのか？

先の世界環境会議で、先進国と後進国の間、その考え方に大きな違いがあるのは当然にしても、地球環境の保護という見地からは共有しない訳にはいかない。国の間の不平等感を埋め合わせることは、至難の技。先進国が先に地球を汚し、後進国が汚して悪いという法はない。仮

に、自国の都合と今の豊かさ、幸せを棚上げして考えるなら、やはり空恐しい事態を想像しない訳にはいかない。

西安の史跡を歩きながら、今日の平和もつかの間なのかもしれないとわけわからぬ不安を覚えた。過去に人類が残した遺跡は、一体なんなのか、なにを語っているのか、考えさせられる。果たしてこの二十世紀我々は二千年後どんな形で残せるのか。空のブルーとは反対にグレーの一日だった。

北　京

この旅もいよいよ納めの地。中国には北京あり、南京あり、西京あり、飛んで東の海に東京あり。やはりアジアはひとつか。

あと二つ残した目的を果たす事により、旅団も大願成就、そしてこの旅は終わる。納めは首都北京である。

北京もまた栄枯衰退、皇帝の王宮を中心に繁栄する。史跡もそのままに残されている。飛行機は予定通り。さすが中国一の大空港、混雑している。ゲートを出るまで優に五十分を要している。これが中国と納得できるようになっていた。

旅団の添乗員は、日本から一人。上海から一人、都合二人が北京まで添乗してくれた。それに各都市で一人ないし二人が土地のスペシャリストとしてバスとタッグで添乗して来る。従って不自由は全くない。至れり尽せりのお世話を頂く。

添乗員の方には、最高に恵まれたと思う。先ず上海から超姑娘が添乗した。北京まで献身的に尽くしてくれ、旅団は嫁にしたいやら、娘にしたい程で、まことに気立てのいいお嬢さんなのである。男性軍は夫々の思惑の中で、なんとかこの姑娘、葉さんに、世話を頼んだり用事を

お願いしたり、特別自分だけに好意を示して頂きたいと思っている。しかしそうもいかない。旅団の男性軍は、六十年もしぶとく生き抜いてきた勇士ばかり、心とは裏腹に誰ひとりそんな素振りも見せない。そして無視を気どっている。僧侶が二人もいては堅苦しくていけない。暗黙の闘いは、結局北京のゲートを後にするまで空振りに終わってしまった。私は思う、姑娘よ、あなただけは我的。你だけは、世界一幸せになって欲しいとネ。請。

北京から乗り込んだスペシャリスト。いつものように、自己紹介をしている。名前は孫という。運転手も孫といっている。背丈一八五センチ、色黒で壮観な男ぶり、見るからに、社会主義国家の代表選手に見える。目の輝きから、並の者ではない。或いは正規の党員かもしれない。私は悩んでしまった。これまで、添乗員にはあれこれ執拗に質問して来ただけに、北京でそれが出来なくなっても困る。

私は冒頭に聞いてみた。「オイ孫さん、あなたはしっかりとした政府の党員ですか。」彼は言う、「そう見えますか。」「ハイ、見える」と答えてみた。彼は、はじめてニッコリ笑い残念ながら党員ではありません。

党員だったらこのバスには乗りません。エリートとして国家の仕事に従事します。と答えてくれた。納得して安心した。私はあなたを見た時党員ではないかと疑い、名前を聞いて損したと思った。運転手さんの名前も孫さん。これは大変だ。大損したと思ったからと言うてやった。なにも私は思想に固まった人を差別している訳ではない、しかし、生まれつきどうにも肌に合わないと思っている、それだけのこと。

私がキライなものは、同じく相手も私を嫌いになるに違いない。

そんな間柄で行く道を同じくしたら、限られ

た人生の時間がムダになる。

これだから歴史の中で、また現実にイデオロギーの絡んだ紛争は、永久に解決しないし援け合う間柄にはなり得ない。

一部の思想で、人の自由、信仰の自由まで奪ってしまうような思想だとするなら、私の正義からはやはり許せない。ただ厄介なのは向こうも正しい正義に立脚しているから解決しない。人間の全ての問題、唖み合いも戦争も、お互い信ずる正義で戦うから争いは永久に無くならない。

日中友好の足跡と広済寺

ガイドをいただきながら、空港よりバスで直行。すでに亡き、横浜善光寺初代総代により設計建立された。日中友好医院を訪ねる。都心には珍しく、駐車場が広い、先見の明。緑に囲まれ、病院らしい落ち着きと、環境が整っている。建物を見るだけで、伊藤先生の思想、お人柄、人となりがうかがえる。

粉骨砕身、心血をそそいだ日中友好の礎、そこに立つだけで、先生の偉大さ、ご立派さがうかがわれてならない。早速、医院長代理が駆け寄り、手厚い出迎えを受ける。

働く医者も、設備も北京の最高のレベル。外来患者も毎日二千人を超えると説明があった。近代医療五〇%、漢方医療五〇%、西洋医学と東洋医学の併用。

病気の根本的原因と治療には中国独特の根源的治療医学の分野まで踏み込んでいる。伊藤先生の御遺志である日中友好はもとより世のため人のため脈々と受け継がれ発展している。偉大な貢献の実態に触れ敬服する。

医院内はゆったりと、あらゆる設備が機能的に配せられ、近代性と中国古来の美しさを合わせ持ち、一見ホテルではないかと錯覚する。医

院内を案内する先生から特別な関係者だけという、漢方薬草の貯蔵室まで見学が許され、東洋医学、漢方治療の神髄に触れたような思いがする。

伊藤先生の令夫人も建設中に何度か訪問された様子であった。しかし完成後は初めてとか、ご覧になって感銘一入であったことと思う。ここに生き続ける偉大な足跡。横浜善光寺でのご活躍と合わせ見ながら、平成に生きた〈ジョン万次郎〉の権化なのかも知れないとそんな気がした。

北京の観光ガイドブックに、『北京で病気になったら迷わず日中友好医院へ……』と書いてあるほどに、まこと立派なホスピタル。

さて次行程、目指すは北京の名刹、弘慈広済寺。中国仏教協会本部にもなっている。北京では最重要特別地域の一角、故宮のすぐ近く政府要人の居住地沿い。

それだけでも名刹の役割と位置付けが歴然としている。

十三世紀の金朝末期に建立され、西劉村寺といった。のち弘慈広済寺と改められる。

日中戦争、内戦、革命騒動で大きな損害を受けるも、由緒ある寺院として立派に修復、復元され今に至っている。

日本仏教協会関係者は無論学者、専門家に至るまで、素通り出来ない重要な寺。また世界の仏教関係者も必ず訪ねるところと聞いて納得した。横浜善光寺留学僧育英会の中国関係窓口にもなっている。大寺院と思いきや、見過ごしてしまう程、質素でこじんまりとしている。これまでの寺院は、その規模と壮大さに圧倒され続けて来た、それだけに拍子抜けしてしまった。この規模の寺が、何故名刹なのか、大きさも横浜善光寺とさして変わらない。しかしやっていることは中国仏教興隆の拠点だというから驚

く。他の寺院と違うところがはっきりとしてきた。横浜善光寺と同じく中身が濃い。嬉しくなりました。大きさや、衣の色だけで、モノや人の判断をしてはいけません。訪ねるに、観光、物見遊山的参拝者はなく、真に救いを求め、安らぎを願う方々のお寺であることが、中国寺院の新しい発見につながった。

私が庭を散策していると、参拝に来たらしい中年の男が何やら話しかけて来た。

私も積極的に挨拶し、流暢な日本語で話してみた。ところが男も負けてはいない実に中国語がうまい。やがてポケットからタバコを取り出し、私に吸えという。私は思い切って三本引き抜いてやった。まさか三本も取られるとは思っていなかったのか、男は少し顔色を変えた。しかしまたニッコリ顔で話し続けていた。言っていることはまったく判らない。私もポケットから日本のマイルドセブンをとり出し箱ごと男のポケットにねじ込んでやった。そしたら「謝、謝、ドゥィグチィー」といいながら、握手まで求められ周囲から拍手喝采、いい気分でした。見事日中友好親善をはたした気分。

さて広済寺でも、方丈より訪問の事情や、育英会の現状と将来についてさらに詳しく報告、そして一層の日中友好交流について意見交換をする。

追悼供養

いよいよ最終目的。成寿山横浜善光寺開基、故村岡満義氏の二十三回忌法要と、初代総代故伊藤喜三郎氏の追悼供養を執り行う。

方丈より意義と広済寺との関わり、そしてお二人の法要を同時に執り行う事のできるご縁と奇跡は、まことに『宗祖　道元禅師さまの御導き　お慈悲』以外なにものでもないと涙ながらに、論語の一節に『終わりを慎しみ　遠きを追

えば　人の徳　厚きに帰す』道元さまの『身をけずり　人に尽くさん　スリコギの　その味知れる　人ぞ尊し』。

横浜善光寺の信徒のご多幸、ご隆昌を第一に、開基さまと初代総代に対し、心からの報謝を奉ります。またこの旅団が障りなく、無事に帰国出来ることを合わせて祈願する。

宗祖第二の故郷で『般若心経』の読経。

旅団の最終にふさわしく、蒔田僧侶の声も、水晶のようにすきとおり、朗々と見事な伴奏。これまでとは違ってとても清々しく、壮快な気分。晴れやかに穏やかに読経できたこと、ひとり私ばかりではなかったと思う。

旅行・雑談・頭は使うもの

少し余談になります。旅先での色々、先にも少しふれている。各地、何処に行っても変わらないのは、すさまじいばかりの物売り、押し売り合戦。

正直、ほとほとうんざりする。何処でもユックリ座る場所がない。歩く道はふさがれ、逃げ道は閉ざされる。落ち着くことが出来ない。寺院といえども例外ではない。

ただ天童禅寺の食殿だけは全くなかった。世界中どこの国に行っても、大なり小なり同じ光景は見られる。だから敢えて取り上げる様なことでは無いかも知れない。

しかし少し書きたくなる。問題は程度。場所とタイミングがある様に思う。どんな一流の食堂でも、サービスはそっちのけ店ぐるみで商売がはじまる。食べさせるより、売ることが優先する。

考え様では、いながらにして買い物が出来る。その点から言えば一種のサービスかも知れない。くつろぎ、ゆっくり話しながら食べるということはとても出来ない、チョット油断すると、

もう手がつけられない。大概根負けしてしまう。結局買わない訳にはいかなくなる。観光客だから一見客という見方もあるのかもしれない。自分たちの店だからなにしても悪いとは言わぬ、しかし一部の人達のために、折角いい想い出が帳消しにされたことも少なくはなかった。そのために『中国の人達は』と、言ってしまうのはやはり辛い。いい意味では、このバイタリティこそ、世界中を席巻し、成功している華僑の人達に通じているのかも知れない。この逞しい底力はとうてい日本人の及ぶものではない、何千年という歴史と伝統の差かもしれないと思ったりもする。これから先、地球上に何か起きても、中国の人達だけは生き残れると思った。

さて、こんな状況下を歩いて来て、決してイヤな顔をしない二人の異星人、何とわが旅団にいた。方丈と蒔田僧侶である。実に不思議。この方々に或るとき尋ねてみた。

答えは簡単、「持てる者は、必ず慳貪になる。失いたくないから心配が生まれる。また周囲のことが気になる。自慢ではないが、私は初めから無い。無いから使う心配がない、従って失う事も無い。どう安心でしょう」。……とおっしゃる。合点はいかないが、何となく説得力がある。蒔田僧侶に問うても、多分、同じ禅問答になる。自分が恥をかくだけだ。ところがである。そんな方丈がどこに行っても必ず、いの一番誰よりも先になにか買い求め、それを両手に見せびらかしながら歩いている。私は買わされてはいけないと終始逃げ回り、断り続けることにひたすら専念する。ところが逃げても逃げても追い回され、売り子と同じように落ち着かない。

方丈は始めに紋どころあり。これが目にはいらぬかという具合。初めに何かひとつ手にするから、従って追い回される事が殆どない。

これは無い者の強味ではなく使う頭の知恵の

分量。旅行中、私は拒否症に落ちて、それすらもできないでいた。だからと言ってなにも欲しくないものまで手にする程の勇気もない。方丈はそんなことはどうでもよい、物の価値判断ではなく手当たり次第といった方がいい。私はそれを見て、初めは笑っていた。しかし後半になりやっと気づいた。頭も金も使いよう、チョットの事で自分の安全とゆとりをもつことができる。方丈はどんな処でも、たとえ道端でも歩きながら、簡単に買ってしまう。私から見れば買ってあげない方がいいと思う場合がある。だから言ってみた。「方丈、仕様もない、安もの買いはいかが」かと。

大事な事は断る勇気。与えない勇気も必要なのではありませんか。さらに大事な事は、彼らにいまの境地から早く抜け出る勇気を与えることこそ大事であり、それが方丈の役割、真の慈悲というものではないでしょうか、どうでしょう。と詰め寄ってみた。気持ちのいいものです。

ところが方丈は……ハァハァハァー。

「トーゴさん教えてくれてありがとう、頭がいいよ、おっしゃる通りです。実にその通り。」なぜか方丈、素直に認め過ぎる。

さてトーゴさんおっしゃる通りに〈慈悲〉〈おもいやり〉の使いわけはむづかしいネエー、あなたの言うその〈使い分け〉が美しく出来るようになったら、修行はおしまい。『与えるも慈悲、与えないも慈悲』。さあその使い分けどうします。

方丈、なんと〈慈悲の仕訳〉と来た。どこですり替わったのか、態勢が逆転しているように思う。〈すべては人を救う〉というのが基本でありその標準から発している。

言われてみると私には標準がない。自分の好き、嫌いで決めている。結局自分が何に言うたのか分からなくなってしまった。

方丈のご性格は、どんな意見、忠告でも必ず

喜んで聞く、また言ってくれる人に感謝し礼をいう。しかしひとつも直さない。いつでも自分の信念で道を歩いて行く。

いまひとつ、方丈は行く先々で、あまり豊かでない人達を目にしては、すぐ思い詰めたように悩む。どうする、どうしよう、あの人達を、なんとか豊かに幸せにしたい。どうしたら救えるのか、方法はないか、自問自答しておられる。二度三度ではない、四六時中。切羽詰まったように苦慮する。歩きながら〈おもいやり〉が生まれる。なんとも托鉢乞食の本心真心は考え、悩む次元が違う。

菩提心というか、それが意識しなくともいつでも、肝に座っている。

トーゴさん「どうする」と私にも向かって来る。私に言われてもどうしようもない。「それは方丈の仕事、お好きなようにして下さい。あの人達はあれで結構幸せなんですよ」、と言ってしまう。本心私の知ったことではないのです。

方丈、チョット待って下さい。ここは中国、外国です。すべては〝治外法権〟そんなことは、こちらの為政者、専門家にまかせましょう。

それより方丈、まだ「私も豊かではありません、決して救われておりません。先ず順番から言って私が先です。」と答えることに終始した。しかしどう転んでも私の知恵と屁理屈では通じない。

方丈の菩提心、まこと湯水のごとく、いつでも処かまわずどんどん湧き出てくる。『尚、廻らして成仏得度回向するなり』か、参った。

三十周年記念訪中も、全ての目的を、予定通り達成した。旅行中、トラブル、ミスも全くない。また誰ひとり、病気や怪我もない。行く先々で、色々な奇跡や偶然に出逢った。

雨を乞う街には雨をもたらせ、雨を喜ばぬ旅団の道のりには曇りもなく、風も黄砂もなく、

寒ささえなかった。

すべて『たまたま偶然にうまく運んだ』と言った方が良いのかもしれない。それでも何故？どうしてを言われても私にはわかりません。

しかし何か言い知れぬ、〈全ては天意〉というか、何か〈未知の力〉によって導かれたような気持ちを否定することも出来ない。

そんな旅、そんな訪中古寺巡礼の旅であった。

旅行後記

北京を案内してくれた例のガイド孫さん、やはり終始、愛想はよくなかった。

好きになれと言っても、なんとなく好きになれないタイプ、と言った方が適当かも知れない。何とかジョークを言おうとしてもたつき、ジョークにもならない。チョットしたユーモアも通じない。いつもきまりわるそうにしていた。しかし一生懸命が伝わってくる。彼の人柄は時間と共に旅団に溶け込み、咬めば咬む程に味が出て来た。私はまるで反対、愛想は良いが咬んでも、味が出ない。

いよいよ帰国寸前、北京空港に間もなく三十分というバスの中。突然、彼はマイクを握りしめ、やにわに演説を始めた。いよいよ本性を剝き出して来たと思った。

「私、孫は縁あって、日本横浜善光寺古寺巡礼の旅に二泊三日、寝食を共にした。これは私にとって〈運命的な出逢い〉。昨日、広済寺ではじめて信仰の尊さ人間の崇高さを発見し、夕べは眠れない思いでした。これまで数えきれない外国人、特に日本人をガイドして来た。しかし、ついに〈人間にふれる〉ことはなかった。私は日本に行ったことはありません。私は戦争を知りません。従って、日本の文化、歴史、生活、習慣は、本を読み人に聞くだけで、充分わかりません。

旅行期間中ご覧いただきました様に、中国は決して豊かではありません。しかし歴史と伝統は、世界のどこにも負けないものを持っています。これは過去のものであって、中国のいまの私達に直接豊かさをもたらすものでないこと、誰でも知っています。

でもすべて尊い祖先なのです。だから大事に取り扱い、大事に保存し、敬意を払わねばならないのです。それが私達の在り方だと思っています。

いま私は、自分の言葉で自分の考え、思っていることを話しております。これは全く私の自由意志なのです。こんなことは初めてなんです。どうしても話さない訳にいかないのです。

許して下さい。

いま中国は発展途上にあります。人口十二億五千万人。膨大な人達で溢れかえっております。四千年～五千年の歴史と伝統も、また特有の歴史、文化、生活、習慣、そして中国人の持つ本来の問題や習慣、そして必ずしも自分の自由意志ではない〈社会主義〉という習慣を、国の事情により持たされていることを知っていただきたいのです。

政治は社会主義、経済は自由主義、市場経済の過度期的最中で、混乱しながらも何とか発展しようとしているのが現状です。或る人達によれば、中国という国は、世界の常識に外れ、特殊な国という評価があることも知っています。全ては国の〈計画配分〉という制度で割り振りされているから、言われているのかもしれません。

しかしこれも、自由になりすぎたら、一カ所に人々が集まり過ぎて、国のバランスがとれなくなることも分かって欲しいのです。

中国では個人の自由というものは限られており、とても少ないのです。

さすがにすごいと本の皆様は『安全と、水と、

自由』には、金がかからないと思っておいでだそうですが、中国は違います。持てる金と労力をいくらつぎ込んでも、足りないのが現状なのです。だから日本の国や自分の自由、自分の豊かさを標準にして、中国と比べないで欲しいのです。あらゆる面で違和感を感じられることと思います。

道路事情、衛生事情、物販事情など、この全ては、中国人の平均的、生活水準が低い事に起因しています。この印象を日本に持って帰って欲しくないのです。

事実があまりにも厳しいからです。私は皆さまが漠然と中国の旅をされなかったこと、よく知っています。

私は中国人と日本人の共通点〈家を大事にし、親・祖先を敬う〉そして〈長幼の序〉に基づいた価値観を共有できる民族だと認識します。だから僅かの間でも、価値観の共有が確認できれば、心から尊敬し信頼し合うことができると思っています。

中国は何処に行っても、人人人。自転車を黙々とこぎ続ける人達。道路標識はあっても、ないと同じ。私達のバスに向かって、猛然と立ちはだかる人たち。

道路は人のものであって、自動車の走る所有物ではないのです。だから、こんな状況の中でバスを運転できる運転手は、標識のない空を飛ぶパイロットよりはるかに難しくエリートなのです。これからの中国は今のままではありません。今のままであってはいけないのです。これは誰の責任でもなく、中国人一人、ひとりの自覚と責任、そして努力が必要なのです。

私は中国を愛しています。それだけに少しでも学び、自分と中国を高めたいものです。十年後はキット変わります。これは本当の心です。どんな国の歴史にも光もあれば影もあります。

これからの中国には光り輝く歴史を作るんです。私はこの仕事に従事し、はじめて多くを学びました。とても色々な、キツーイ質問や、疑問、ご意見、そして私に対する忠告と信頼の言葉を頂きました。

聞いて下さい。中国に昔から美しい詩が残っています。これもそのひとつです。

《年々歳歳　花相似たり　歳歳年年人同じからず》

毎年咲く花はみな同じ、しかし人間は学ぶことと努力で成長し変化する、国も同じです。

この訪中団のリーダーは誰か？先生はだれか分からない程でした。多分衣を着ている人が先生だと思います。でも荷物を持ったり運んだり、おやつを配ったり、手伝いばかりしていました。だから私は尊敬出来るのです。

やっぱり、日本横浜善光寺は、さすがにすごいと。私は信じます。謝謝。」と結んだ。彼のメッセージは旅団の心をゆさぶり、瞬時に国境を取り払い、心と心、魂と魂をしっかり結んでくれた。新しい時代の新生中国の新しい発見をさせてくれた。止まれ「おごる日本は久しからず」。バスの車窓に中国の樹木が萠えはじめ冴え渡っている。こんな美しい風景は見ていなかった。否目に映っていなかったのだ。「心素直なればすべて美」なのか。

この訪中で悠々の流れに立ち、色々な人達に出逢い、学びを深めることができた。お陰さまで私も少しは柔軟心を取り戻したのかもしれない。否、取り戻したと思いたい。道元禅師さまの言われる「われ彼の地において柔軟心を学ばん」とはこのことか。